



著: はるゆき

とある深い森の中、魔法の力をもった真っ白な牝鹿が住んでいた。牝鹿は夜な夜な美しい人間の乙女に姿を変え、森の中で遊ぶことが大好きだった。

ある日森の外れの小さな城から王子と狩人の一団がやってきた。黒い巻き毛の王子は、姿は美しかったが気が小さくて有名だった。狩りなどしたくはなかったが男らしくなって欲しいという父王の命令で逆らうことができなかった。しかしひとたび森に入ると、緑の林冠から差し込む光やさえずる鳥の声にたちまち心を奪われた。

「ああなんて素敵なところなのだろう。ここはまるで天国のようだ！」

心の赴くまま足を運び、誰も気がつかないうちに彼は一団から1人離れていった。

白い牝鹿は森の奥で目を覚ますと、軽やかな足取りで近くの泉にでかけていった。日も暮れ始めるなかこんこんと湧き出る清水に身を浸した。一掬いした水を身体にかける、それを繰り返しているうちに森を紅く染め上げていた夕日が一際大きく輝いた。その瞬間そこには1人、白く輝く美しい森の乙女が現れた。

森の奥深くまで足を踏み入れた王子は、やがて自分が1人になってしまったことに気がついた。しかし産まれて始めてたった1人になれたことにも気づいていた。落ち葉でふかふかの地面に横たわるとふくよかな土の香りがする。深い安らぎを感じ王子はそっと目を閉じるとそのまま眠ってしまった。

乙女に身を変えた牝鹿は高揚した気持ちで森を駆け巡っていた。日が沈み、闇が深くなるにつれ彼女の姿は一層白く輝いく。噂好きの若い樹々たちは、彼女に森の外れの狩人を教えた。また、ほっそりとした白樺の木からはここからそう遠くないところで王子が眠っていることを囁いた。

「まあ、人間の男ですって。面白そう。見にいったやろう」

雌鹿は好奇心旺盛に目を輝かせ風のように駆け出した。

木々の少しだけ開けた場所で王子は健こやかな寝息をたて、長い手足をなげだして眠っていた。

乙女は木陰に身を潜めていたが王子がぐっすり眠っていることがわかるとそっと近づいていった。

そして長い髪を垂らし、息を潜めて顔を覗きこんだ。

夢のような甘い香りに王子はそっと目を開いた。

「君はだれ？」

娘は王子の澄みきった緑の瞳に警戒心を忘れた。

「私は、森の娘」

「君のように美しい人を私は見たことがないな」

「森の娘は美しいものよ」

「そうか。私は今日この森に強く心を奪われた。そして君もこの森の娘というから、心を奪われているのかもしれない」

そのとき、木々が不安気な音をたてて葉をゆらし始めた。危ない、危険、危険、危険……。娘ははっと身体を強ばらせた。

「私、行かなくては」

何も聞こえない王子は驚いた。

「いきなりどうしたんだい？ 待ってくれ、行かないでくれ」

身体を引こうとしたのを感じて、とっさにその手を掴んで引き寄せた。娘は拒めなかった。その真摯な瞳から目を反らすことができなかった。

「何者だ、王子から離れろ！」

突然大声が聞こえ二人のすぐそばの地面が跳ねた。狩人たちが二人を見つけ考える間もなく銃を撃ったのだ。身を翻すと乙女は一瞬で牝鹿に姿を変え、闇に跳んだ。

「待って、待ってくれ！」

「王子、大丈夫ですか？」

駆け寄って来た狩人たちの声は王子には届かず、ただ悲しく乙女の消えた闇を見つめるのだった。

目が覚めるとそこには緑の林冠ではなくて、いつもの見慣れた天井があった。王子はがっかりして身体を起こすと膝を抱えて目を閉じた。そうすることで、夢の中の娘の姿をもう一度思い出せないかと思ったのだ。とても美しい人だった。しかし人間ではないのだろう。ひょっとしたら魔女かもしれない。私は魔法をかけられてしまったのだろうか、あれからあの娘のことばかりを考えている。

剣の稽古をしているときも、歴史の勉強をしているときも、好きだったはずの音楽の授業のときも。頭の中には娘と目があったときの様子や、銃の音に驚いて眼を見開いたときの様子を思い出していた。いつしか王子は時間ができると、1人で森を散歩するようになっていた。家来達の手を盗んでこっそり城を抜け出すのは始めこそ難しかったものの、だんだん上手くなっていった。そして、城にはたくさん抜け道があることを発見した。慣れて来ると少しずつ森にいる時間が長くなっていった。そして思う存分1人の時間を満喫すると、何食わぬ顔で城に戻ってきて執務をこなすのだった。

ある日いつものように城を抜け出し森を散策していた。
「喉が渴いたなあ、ベリーの茂みに行ってみよう」
小川のせせらぎに耳を傾けながら歩いていくと赤や紫のベリーがたわわに実る茂みがあった。口に放り込むと甘酸っぱい果実が口中に広がる。一つ、二つと頬張りその味わいを心ゆくまで楽しむと、満足してふかふかの地面の上に横になった。木々の間からは抜けるような青空が見える。今日は本当に天気が良い。いつのまにかうとうと心地良い眠気に包まれていた。

ふと目を開けると、少し離れたしげみから二つのビー玉のようにまん丸な瞳がこちらをみている。鼻をひくひくと動かしてこちらの様子を伺っていた。目を合わせないようにしながらさりげなく寝返りをうつと、その生き物はそっと葉影から姿を現した。

それは一羽のうさぎだった。ぴよこぴよこと跳ねながら王子の足元の方へ回ると、無心に手近なベリーを食べ始めた。ひとしきり食べると、今度はちょっとずつ王子のほうへ近づきひくひくにおいを嗅ぐ。服のにおい、手の平のにおい。寝ているふりをして目を閉じていると、頬の当たりがくすくすしはじめる。笑出したいのを我慢しているうちに、まぶた、口周りのにおいを嗅ぎ周りうさぎは安心したのか腕のあたりに頭をうずめてそこでまるくなって眠ってしまった。

あまりにも可愛らしくてしばらくそのままにしていたが、水が飲みたいくなって王子はそっと立ち上がった。すると気配を察したうさぎもぴよこんと立ち上がったが、逃げることなく王子の足に頭をすりつける。人懐っこいその様子に頬が緩み、王子は思わず話かけた。

「なあ、おちびさん、このあたりに水の飲める場所知らないかなあ」

話かけたあとに一人思わず苦笑したが、うさぎはまるで言葉がわかったかのように、二、三度耳をぴくぴくさせると、数歩すすんで王子を見上げた。戸惑って見つめていると、うさぎは付い

てこいというようにまた数歩進んで立ち止まる。なんとなくわくわくした気持ちになって、王子は着いて行ってみることにした。

「君はこの森の住人だものね。案内をしてもらえるなんてありがたいなあ」

ちゃんと王子が着いて来ているか確かめるように振り返り振り返りうさぎはすすむ。苔の生い茂った場所を抜け、倒れた巨木を乗り越え、森の奥へ奥へと2人はすすんでいった。

薄々自分が帰るときに道を思い出せるか心配になってきたころ、少し開けた場所に出た。樹々がその場所を守るかのように天井を覆い、木漏れ日が優しく照らしている。中央に小さな楕円の形でほとほとと泉がわき出している。

そばに一本のほっそりとした美しい白樺の木が立ち、そこに寄り添うようにあの娘がいた。美しい小麦色の髪を垂らし、鳶色の瞳でこちらを見つめている。王子は驚いてその場に立ちすくんだ。娘はそっと声をかけた。

「私のことを探していたでしょう。だから、待っていたの」

「僕が探していることを知っていたの？ 君は不思議な人だなあ」

「あなただって。何故私を探していたの、私のこと、怖くないの？」

「なぜ。姿を変えられることを知っているのなら、素晴らしいことじゃないか」

「そう、かしら」

娘はまじまじと王子の黒々とした巻き毛を見つめ、また深い緑の優しい瞳をみた。それはとても素敵に見えた。

「このこが僕をここに連れて来てくれたんだ」

うさぎは王子の足元ですっかり体を丸めて眠りこんでいる。

「まあ、驚いた。とても怖がりなこなだよ。あなたに懐いているのね」

頭を撫でてやると、気持ち良さそうに目を細める様子を見て娘が言った。

「僕のこと、人間だと思ってないんじゃないかな」

「ふふふ、もしそうだとしたら森の生き物にしては無防備過ぎるわ」

娘も近づいてきて、片膝をついた。ふわっとほのかな甘い香りがした。

2人はうさぎを挟んだ形でその場に座り込んで、他愛もないことを話した。しかし、楽しい時間というのはあっというまに過ぎていってしまうもので、すぐに城に戻らないといけない時間になってしまう。

「あの、また来ても良いかな」

「ええ、そのときはこのこが案内するわ」

「そういえば、名前言ってなかったね、僕はアレン」

「私はローリエ。森の娘、ローリエよ。いつでも来たらいいわ。普通の人間はこの場所には来ることができないの。そのときはこのこ、四葉があなたをここまで案内してくれるわ」

「四葉？ 面白い名前だね」

「おしりのところの毛色が四葉模様なのよ」

ローリエは四葉のふわふわのお尻を指した。たしかに茶の毛皮に白い楕円が四つつながっていて四葉の形に見える。

「本当だ。これなら他のうさぎのなかからも見つけられそうだね。よろしく四葉。じゃあ、さよなら」

「さよなら。白樺の横の道を抜けていけばすぐお城に出られるわ」

手を降ってその場をあとにし、白樺のわきを抜けてしばらくもしないうちにすぐ葉陰に城が見えてきた。

「あんなに歩いたのに、意外と近かったのかな」

ずいぶんと長い間森に居たので、さすがに誰かが気がついているのではないかとヒヤヒヤしながら自分の部屋に戻ったが誰にも気づかれなかったようだ。ほっとして今日起こった素晴らしい出来事を思い出しながらベッドに倒れこむと、そのまま夕飯の時間までぐっすりと眠り込んだ。

ローリエと出会ってからというもの、アレンは少しずつ変わっていった。今までぼんやりしてるが多かったが、日課に身をいれてこなすようになった。それからあまり関心を見せなかった侍従たちに自分から声をかける姿が見られるようになった。この変化を、王は密かにとうとう次期国王としての自覚が芽生えてきたものとして喜んでいた。

日課をこなす傍らアレンは森に行った。ローリエは森についてたくさんのことを教えてくれる。毒を持っているキノコの見分け方、野生動物の足跡からわかること、薬草の使い方など。どれも王子にとっては刺激的で新しい発見の連続だった。2人で過ごす時間はとても楽しい時間だった。

「こんにちは、四葉。ローリエに会いたいんだけど、案内してくれる？」
四葉はクローバの原っぱでチョウチョを追いかけて遊んでいたが、アレンが声をかけるとすぐにこちらに駆け寄ってきた。茶色のふかふかの身体をこすりつけて、久々に会えた喜びをアピールしてくる。

「最近お城の用事をいろいろ言いつけられるようになって、なかなかこれなかったんだ。ごめんな。」

頭を撫でてやると気持ちよさそうに目を細め、存分に彼の手のひらを堪能すると、四葉は歩き始めた。時折ついてきているか確かめるように振り返りながら、道なき道をすすんでいく。しばらく行ったところでふと四葉が立ち止まった。

「どうした？」
鼻をひくひくさせたかと思うと草むらに顔をつっこんだ。不思議になって近寄ってみると、そこには美しい数個の卵とこちらを怯えたような目付で見つめながらも決して逃げようとしない母親の雉がいた。

「ん？このお母さん雉、様子がおかしいな。」
前にローリエに鳥の親子の話を聞いたことがあった。確か産卵を終え雛が育つまで母親は賢明に子供を守る。時には自分より大きな生き物を威嚇したり向かっていくことがある、と言っていた。しかし今このお母さん鳥からはそんな激しさは感じられない。その場から逃げようとはしないものの、どこかぐったりとしているように見えた。

「どうしたの？アレン。」
振り向くといつの間にそこにきていたのかローリエがいた。近寄ってきて一緒に草むらを覗き込んだ。

「まあ、雉の巣ね。でもこのお母さんどうしたのかしら。こんなに近寄っても何もしないわね。」

「どこか様子がおかしい気がするんだけど。」

「そうね、ちょっと見てみましょうか。」

ローリエがそっと手を伸ばし母雉を抱き寄せた。鳥は抵抗せず、ただその身を任せている。

「このお母さん羽をけがしているわ。」
広げられた片羽を見ると、根元からむしられていて2センチほどの穴があいていた。生々しい傷

跡は血が乾ききっておらず、大きな力がかかったのだろうか翼の角度が変わってしまっている。

「きっとヘビにやられたのね。卵を狙って襲ってきたのよ。」

「卵は守りきれたけど、怪我してしまったのか。骨は折れてしまっているのかな。」

「そうね。手当が必要だわ。」

ローリエは手近にあった枝から手頃な大きさの物を一本選ぶと骨に沿えた。鳥は目を瞑っていて小さく呻いたが大人しくしている。

「どうするの？」

「痛み止めの煎じ薬があるわ。ひとまずはこれを飲ませましょう。」

ポケットから小さな小瓶を取り出すと、静かに何度か反転させたあとそれを小さな匙に少し垂らした。

「支えてくれる？」

アルが親鳥を抱え、口をそっと開けさせた。すかさずローリエが匙を口に入れ、薬を飲み込ませた。

「ちゃんと飲んだわ。しばらくすれば薬が効いてくるはず、もう大丈夫よ。」

「うん、良かった。でも、卵はお母さんがこんな状態だけど大丈夫かな。」

「ここから動かすわけにはいかないわよね。」

相談している二人をよそに、四葉がふんふんと卵の匂いをかぎ始めた。どうするのかと見てみると、卵の横で丸くなってしまった。

「あなたが巣を守るっていうの？」

うさぎは素知らぬ顔をして居眠りをはじめた。

「でも、ヘビなんかと戦えるのかなぁ。」

「四葉は男の子だし闘争心はばっちりよ。それに見て、この後ろ足。このこの本気のキックは相当のものだわ。」

眠りこんだ四葉をみながらローリエは微笑んだ。

「任せましょうか。このこったら、とってもかっこよい紳士うさぎだったのね。」

数日後、二人は雉の様子をみに森にやってきた。四葉は卵の傍につきっきりのように、変わりにローリエが待っていてくれた。雉の巣に近づくと、しきりにヒヨヒヨと鳴く声が聴こえてくる。覗き込むとそこには卵から孵ったばかりなのだろう、まだ羽の濡れている雛が数羽いた。

「うわぁ、可愛いなぁ！」

二人が見ていると雛達はおぼつかない足取りでこちらに近寄ってくる。茂みからのそりと四葉が現れた。毛並みが乱れ、心なしか疲れているように見えるが、しかし口元をしきりにもぐもぐ動かしていた。どうやらお食事中のようだ。

「四葉、久しぶりだな。」

うさぎはこちらをちらりと見てから雛達の方へ近づいていった。

「すっかりお父さん気取りのようね。」

おかしそうにくすくす笑っていると、末っ子なのだろうか、一番小さくてふわふわな雛がちょ

こちょこと走ってきて座っていたアレンの足の上に潜り込んだ。

「また懐かれています。あなたって森で生きる素質があるのかもね。」

「一応、僕って次期国王なんだけど。」

そう言いながらも、アレンは自分がとても嬉しく感じていることに気がついていた。

四葉が雉の親子と過ごすようになって以来、ローリエが待っていてくれるようになった。どうして自分がくることがわかるのか気になって聞いてみると『森が教えてくれる。』と答えが返ってきたが、木々の声を聞くことができないアレンにとっては全くわからなかった。しかし、いつか自分も森の声を聞いてみたいと思った。

「今日は北の森にいってみましょう。エルダーフラワーが咲いているのよ。」

「へえ、どんな花なの？ぜひとも見てみたいな。」

森は数日間振り続けた雨のあとで、そこいらの葉の上にはキラキラと雨粒が光り美しく清々しい空気に満ちている。ふいに気まぐれに四葉が現れアレンのそばにやってきた。

「やあ、四葉。」

ちょっと頭を撫でると目を細めて気持ち良さそうにしている。それをみてにっこりと微笑むとアレンは先を行くローリエのあとを追いかけた。連日の森歩きはひ弱だった王子の外見を、いつしかすっかり逞しくなった大人の青年へと変えていた。

「エルダーフラワーというのはね、真っ白な霞のような花をつけるのよ。甘くてとっても素敵な香りなの。妖精の力を持っていると言われているわ。」

「妖精の力って？」

「言い伝えがあってね。昔、人間の娘に恋をした妖精の王がいたんですって。でもその娘は重い病にかかっていたの。王は何とか娘に元気になってもらいたくて毎晩娘の枕元に花を持って行ったの。娘を想う王の気持ちがその花に移り、だんだん娘は元気を取り戻していったのよ。」

「それは、良かった。」

「でもね、代わりに王の命が削れていったの。妖精の力を花に託すことによって王は娘を助けようとしたんだわ。」「とうとう娘は健康な身体を取り戻した。でもその日、妖精王は娘に持っていくとした花束に倒れこんだまま死んでしまった。その王の力を受け継いだのがエルダーフラワーと言われているの。」

「なんだか悲しい話だね。」

「そうね。妖精王のしたことを娘が知ることはなかったわ。でも代わりにね、娘はとても長生きして子供をたくさん授かって、生涯幸せに過ごしたというわ。それが王の望んだことだったのよ。」

「へえ、そこまで出来るってすごいな。その王様がどんな気持ちだったのか僕には想像もつかないよ。」

「ふふふ。そうかしら。まあ、いつかきっとアレンにもわかる時が来るわよ。」

ローリエがにっこりと微笑んだ。そのとき、足下で無心に草を食んでいた四葉が顔をあげた。さかんに耳をたてて当たりの様子を伺っている。

「どうしたんだろう。」

「何かを感じているんだわ。何かしら。」

ローリエも神妙な面持ちで耳を澄ましている。こういうときは周りの木々や風と話をしているのだ。アレンには何もわからないので、ローリエが口を開くまで黙って見守っていた。

「森に狩人の集団が来ているみたい。7、8人いるみたいね。」

「城の人たちではないだろう？父上は特別なときにしか狩りを許さないから。」

なんとなく後ろめたい気持ちになってアレンは言った。自分に関係のあるものがこの森を愛する娘の前で動物を殺しているとは考えたくなかった。

「この辺りの者ではなさそうだわ。肌の色が浅黒く、聞き馴染みの無い訛りで話している。南部の者かしら。」

「一体何をやっているんだろう。」

最近重鎮たちの会議に出席する機会が増えたアレンは首を捻った。覚えのある限りでは、南部の動きが議題に出たことは無い。

「気になる？」

ローリエがじっとこちらを見ていた。彼女としても見慣れない侵入者たちの動きが気になるようだ。

「うん。いってみてもいいかな。」

もしかしたら父上に報告しなければいけない重要な出来事かもしれない。アレンは自分が一国の王子なんだという実感が強まるのを感じていた。

「わかったわ。でも私も一緒に行く。」

「でも、危険だよ。相手は何人もいるんだし。」

「わかっているわ。けれどあなた一人ではやつらの居場所を見つけ出すのが難しいでしょ。」

ローリエの瞳は怒りが燃えていた。

「この森に土足で入ったこと許せないわ。何が目的なのか探らなくては。」

危ないことをさせたくないと思いながらも彼女の気迫に負けてアレンはとうとう言った。

「わかった。一緒に行こう。でも遠くからあいつらの動きを探るだけだよ。絶対に近づかない。

約束できるかい？」

「ええ。そうと決まったら行きましょう。」

本当にわかっているのかなあ、と思いながらずんずん進んでいくローリエの後を付いていった。

森の西側では数人の男たちが焚き火の準備をしていた。

「この森は食べ物には困らないな。動物はたくさんいるし、植物も種類が多い。隠れ家にするにはもってこいだな」

1番ガタイのいい男が言った。浅黒い肌に鼻から顎にかけて髭が豊かに生えている。腰には曲刀を下げ、背中には大きな銃を背負っている。

「手付かずだがすぐに畑になる良い土だ。やつらはほんとにこんな良いところをほったらかしにしているのか？ 信じられないな」

「上の連中は楽天家な阿保ばかりなので。この土地を切り開けば国がもっと豊になる。それがわかっているのに誰も声をあげないんです」

1人だけ明らかに肌の色の違う男がいった。比較的若く、細身で眼鏡をかけている。男はうっとりとした表情で続けた。

「我らが主ほどこの国を想っている方はいない。国を豊かにするためにもっと開拓を進めて活用すべきなんだ！」

髭面の男は無表情だが用心深く聞いた。

「私たちに土地を用意してくれるというのは本当なんだろうな。南部は雨が少なく土が痩せている」

「約束する。わが主は部下を大切になさる方だ」

メガネの男は神妙な面持ちで頷いた。

「主はあなたたちに期待しています。働きに見合う報酬をお与えになりますよ」

アレンたちは距離をおいたところから彼らの様子を伺っていた。

「あいつら一体どこの者だ？ ここで何をしているんだろう」

「随分と物騒なものを持っているわね。見たところ1人はこの辺りの人かしら」

「そうだね、知らないやつだけどたぶんそうだ。でも何を話しているんだ？ここからじゃちょっと聞こえづらいな」

「でももうちょっと近づいたら気づかれてしまうわ」

二人が話している間に藪の中から大きな袋を引きずった男が現れた。

「お頭、これ見てくださいよ」

「ん？ なんだそれは」

袋はもごもごと動いていて、髭面の男は表情は変わらなかったが訝しげに聞いた。

「食料です。何日もまともな食事をしてなかったでしょう。いい獲物が手に入りましたよ、簡単に捕まえられました」

男は袋に手をつっこむと中身が取り出した。それは、あの雉の親子だった。突然の出来事に戸惑い怯え、雛たちは哀れな叫び声をあげている。男は一番小さな雛をつまみ上げて嬉しそうに舌なめずりをした。

「親鳥は蒸し焼きにして、おちびちゃんたちはいい出汁がでそうだからスープかなあ。今夜は御馳走が食べますぜ」

「あのこたちを食べようとしているわ！」

「ほんとだ、どうしよう、このままじゃまずいよ！」

とそのとき、足元にいたはずの四葉がいなくなっていることに気がついた。見ると、雉親子を入れた袋をもっている男に無我夢中で突進していつている！

「だめよ、戻ってきて四葉！」

小さくローリエが悲鳴をあげた。男達はうさぎに気づき捕まえてやろうと待ち構えている。アレンは一瞬ためらったが意を決した。

「お前たち、ここで何をしている。誰の許しを得てここに来た！」

心臓はバクバクと胸の内側から激しく叩いている。怖くて手も足も震えていたが、気づかれまいと必死で落ち着きのある声を出そうとした。

突然現れた少年に、驚いた男達が全員こちらを見た。筋骨隆々の逞しい男たちだ。しかも銃をもっている。どこまではったりがわからなかったがとにかく必死に彼らを見据えた。

「あんたは、誰なんだ？」

髭面の男が用心深く尋ねた。

「私の顔を知らないのか。お前たち、この国のものではないな」

髭面の影で小さくなっていたメガネの男がヒッと悲鳴をあげた。

「やつは、いやあの方は、この国の王子ですよ。アレン2世です」

「ふうむ、なるほど。王子様がおんなところで一人でのこのこなにをやってらっしゃるんでしょうねえ」

髭面の男が口の端をゆがめて聞いた。心なしか顔色がどす黒くなっている。

「私は一人でいるわけではない。すぐそばには部下たちが控えている」

手には汗をびっしょりとかいていたが、不思議と言葉が口からスラスラと出てきた。

「森に不審なものたちがいないか見回っていたのだ。お前たちは一体何者だ」

「恐れながら王子様」

メガネの男が額を地面につけながら言った。

「私たちは決して怪しいものではありません。王直々の命令をうけてこの森を調査していた次第です」

「そんな話は聞いていない。証拠はあるのか」

「王はこの調査は極秘に行いたいとの命でした。ここに書簡がございます」

男が懐から恭しく銀の筒を取り出した。遠間からは良く見えなかったが、王がいつも使っているものに良く似ていた。確認しようと近づいていったそのとき、メガネの男が周りの男たちに素早く目配せをした。

（しまった！）

四方八方から手が伸びてきて、アルはすぐに捉えられてしまった。

「馬鹿なやつだ。周りに仲間がいたとしても、お前さえいれば手を出せないだろう。さすが温室で育てられた王子様は違いますねえ」

「離せ！」

「離せと言われて離すやつなんかいませんよ。我々と一緒に来ていただきましょう」

そのとき、まばゆい光が後方から差した。男の一人が驚いて指をさした。

「あそこにいるのはなんだ？」

そこには一頭の白い雌鹿がいた。黒く濡れた瞳でこちらを見据えている。男たちは驚きのあまり金縛りにあったように動けなくなった。アレンは捕まえられていた手から力が抜けたことに気づいた。無我夢中で振り切ると四葉と雉の親子がとらえられている袋を掴んだ。

「ローリエの泉に連れて行っておくれ」

うさぎに声をかけるとピクンと耳を動かしたのでわかったようだ。その様子を確認し、アルは無我夢中で道無き道を走り続けた。すると、行く手にあの泉が現れた。

（ここまでくればもう大丈夫だ）

安心したとたん足がもつれた。そのままアレンは泉の横に倒れこんでしまった。

雌鹿はアレンたちがその場から逃げ出せたのを確認すると視線をはずした。ふ、と光が弱まったときメガネの男は腰につけていた小銃を抜くと獣に向かって引き金を引いた。雌鹿は驚き、一跳ねで彼らの前から姿を消した。男たちは一斉にメガネの男を見たが当の本人は銃を構えたまま、呆然としていた。

泉の傍でアレンは倒れこんだままだった。サクサクと草を踏みしめる音がし、飛び上がってそちらをみやると傍に雌鹿が立っていた。

「ありがとう、君が来てくれて助かったよ！」

駆け寄りかけたそのとき、異変に気づいた。首元からは真っ白な毛皮を赤く染めて血が流れている。駆け寄ると鹿は足元から崩れ落ちた。

「ローリエ！」

彼女の瞳は虚で、口元を緩く開け苦しそうに浅い呼吸を繰り返している。アレンは急いで自分のシャツを脱ぐと裾をやぶって泉の水に浸した。それを絞って血の流れる首元にあてがると雌鹿はぐったりと頭を寄せた。四葉は彼女のお腹に鼻を当てがって悲しげにスンスン鳴き、雉の親子も心配そうに近づいてくる。辺りは少しずつ薄暗くなってきた。アレンは雌鹿の汗を拭い、辛そうな身体を撫で続けた。そしていつの間にか、そのまま眠りに落ちていた。

身体中がぐったりとしているのを感じながら目が覚めた。まだ夜明け前のように空は薄い灰色の雲に覆われどんよりとしている。抱き抱えた雌鹿の様子をみるとどうやら眠っているようだ。出血も止まっている。ホッとしてアレンは辺りを見回した。泉の水が湧き出る音と、どこか遠くで鳴いている小鳥のさえずり以外はとても静かだ。四葉と雉の親子たちも眠っている。

（薬をとってこよう）

いつかローリエに教えてもらった傷の手当に使える薬草を採りに行こうとそっと立ち上がった。

アレンは2日間雌鹿をつきっきりで看病した。身体を拭いたり、ベリーを食べさせたり、薬草を採ってきたりした。雌鹿の容態は日に日に回復していき、とうとう3日目の朝目を覚ますと娘の姿でローリエが起きていた。

「大丈夫、身体の調子はどうだい？」

「あなたのおかげでだいぶ良くなったわ」

顔色は青白いが、それでも幾分か元気を取り戻したようだ。

「傷はどう？ 痛む？」

「ううん、平気」

長い髪を持ち上げて首筋を見せてくれた。痛々しくえぐれた傷口の下から真新しい皮膚が見える。

「こんな怪我をさせて。僕のせいだ」

「違うわ」

ローリエはちょっと泣きそうな顔をした。

「あなたは四葉と雉たちを守ってくれた。でも、お城に戻らないと」

「僕は戻らないよ。君を一人残して行かない」

「だめ。みんな心配しているわ。私はもう大丈夫よ」

強い眼差しで言われると反論ができなかった。

「わかった、今日は帰るよ。でも傷が癒えるまでは絶対に無理はしないって約束してくれる？」

心配そうに言う彼女は微笑んだ。

「ええ、約束するわ」

城に戻る間アレンは考えていた。森にいた男の集団は一体なんだったのか。彼らは到底王の使いの人物には見えなかった。本当に王の使いのものならば、むやみやたらに銃を使うことはしないはずである。

（父上に話さなくては）

しかしその前に3日も無断で行方をくらませたことを何と言われるだろうか。森で怪我をして動けなかった、とでも言うか。しかし、それだどこっそり外出していたことがばれてしまう。うまい言い方はないかと考えを巡らせている間に城の近くまで着いてしまった。

（さて、どうしたものか）

考えこもうとしたそのとき、兵士たちが走ってくるのが見えた。まずいと思ったが時すでに遅く、彼らはあっという間に駆け寄ってくると猛然と腕を掴んで口々に言った。

「王子！ 一体どこにいらしたんですか。王は大変心配されています」

「私たちは三日間、宿場から町外れの井戸の中まで探しに探し回っていたのですよ！」

「とにかく王に報告に行きましょう。さあ、私たちも一緒に行きますからね」

両側からがっちりと腕を組まれ、アレンは抵抗することも出来ずにそのまま父の待つ王の間へ引っ張っていかれた。

冷たい大理石の床の先に王が待っていた。既に別の兵より知らせを受け取っていたのだろう、部屋に王子が入ってきてても驚きを見せなかった。

「.....それで？」

落ち着きと深みがあり民衆にとって安心感を与える声だ。王の手前で跪くとアレンは慎重に言葉を選びながら話し始めた。

「父上、黙って城を出たこと、申し訳ありません」

「そのことももちろんだが、どこで何をしていたのか、私が納得できるよう話してくれ」

黒檀を磨きあげて作られた見事な玉座に腰掛け、豊かな顎鬚をしごいた。顔つきは精悍で、他人を有無言わずに従える強さを持っている。

（信じてもらえるか、わからないけど.....）

狩の日からの出来事をかいつまんで話した。ローリエか雌鹿に姿を変えることや、自分が頻繁に城を抜け出していたことには極力触れないようにした。

「なるほど。それでお前はそのローリエという娘が見知らぬものに銃によって怪我をさせられたから、この3日もそばにいて看病をしていた、という訳だな？」

「はい」

「アレン、お前の素行が最近ずいぶん良くなったことはわかっている。それがその娘のおかげだということも察することができよう」

「はい」

「だがお前は王子なのだ。どこの出かもわからないような娘と遊び呆けている間にやるべきことがあるのではないか？」

王の声は穏やかではあったが、怒りと失望の悲しみが滲み出ていた。

「お前がそんな様子ならば私は心を決めなければならない。アレン。結婚しなさい。近々私はお前の妻として相応しい女性を選んでやろう」

「父上！ でも、そんな、私には早いです！」

「お前は次期国王としての自覚が足らなすぎる。妻を娶ればその自覚も芽生えよう」

「私はそのようなことは！」

ローリエの姿がよぎった。そんなことになれば二度と彼女に会いに行くことは叶わないだろう。急に目の前が真っ暗になった気がした。

「私の話はこれで終わりだ。今日はもう休んで良い。下がりなさい」

それだけ言い終わると視線を合わすことなく王は自室に戻っていった。アレンはその場に跪いたまましばらく動くことが出来なかった。

呆然としたまま自分の部屋に戻ってきたが、怒りと悲しみで何もする気になれない。

（僕は王子なんかに産まれてきたくなかった）

窓からみると外はすっかり夜の帳に覆われ、空には頼りなげな半月が登っている。

（自分のことを自分で決められる、自由が欲しい）

楽しかった数日間を思い返した。森で過ごした時間を思い出している自分には、王子が向いてない気がした。

（父上は自分の理想通りの王子を見つけてくればいい。そうだ、僕はただのアレンだ）

そう考えるとふと心が軽くなった。考える間も無く、今まで一度もしたことがなかったことだが窓から身を乗りだすとそのまま飛び降ると、柔らかい垣根が身体を優しく抱きとめてくれた。

（ふう、なんとか脱出成功だ）

思ったよりも簡単に脱出できたことに微笑みながら、アレンはまっすぐ森に向かって駆け出した。

微かな月明かりの下泉は弱々しく発光していた。水面にはたくさんの白い花が浮かんでいて、辺りには仄かな甘い香りが漂っていた。

（何て素敵な光景だろう）

アレンが眺めていると、小さな声で呼びかけられた。振り向くと、驚いた顔をしたローリエが立っていた。手には泉に浮かんでいるのと同じ花の束を抱えている。

「ローリエ！ 会いたかった。僕はもう城には戻らない、君とずっと一緒にここで暮らす。いいだろ？」

アレンに飛びつかれ、驚いた彼女は手に抱いていた花束を落としてしまった。

「何を言っているの、あなたは王子なのよ。それに、私、私は、そんなことを言われても困るわ」

「王子なんて僕には何の価値もなんだよ。僕はここにいたい。困るって、どうして」

「わからない？ 私、あなたと同じじゃないのよ、一緒になんていられないわ」

「同じじゃないって？ 君は確かに森の声を聞くことができる。美しい雌鹿にもなれる。それが僕の知っている君だ。充分じゃないか。それに僕は、自分がここにいたいって心の底から思っていることを知っている。君は僕と一緒にいたくはないの？」

彼女の瞳が揺れた。

「……アレン」

ローリエは隠すように視線を反らすと小声で言った。

「あと、三日、三日後の満月の夜、もう一度来て」

声は掠れている。

「満月の夜は魔法の力が高まるの。妖精の力を持つエルダーフラワーで泉を満たして待っている。あなたが望めば、きっと私と同じ、森の精霊になることができるわ」

「精霊に？」

「ええ。今から三日後、そのときあなたが心の底からそうなりたいと願うのだったらここに来て」

「わかった」

嬉しくて顔が自然に顔が緩む。魔法の力で自分をごんじがらめにしているものを捨て去ることができるのだ。しかも、この先ずっとローリエと一緒に時間を過ごすことができる。今まで行けなかった森のもっと深部や見知らぬ野生の生き物達、薬草や森の神秘。わくわくさせるものがたくさん待っている。嬉しそうなアレンを見るとつられてローリエも微笑んだ。

「三日間を大切に過ごしてね。一度人間をやめてしまうと、そのときの自分を知っていた人と会うのは難しいから。心残りにならないようにしたほうがいいわ」

「うん。大事に過ごすよ」

お休みを言って別れた帰り道、アレンの心は足取りと同じく軽やかだった。夢のようなことがもうすぐ現実にかかるのだ。そう思うと満月までの時間がとても長いように感じられた。誰にも見つからずに自分の部屋に戻るとすぐさまベッドに潜り込んだ。満ち足りた気持ちがあっという間に心地よい眠りに誘ってくれた。

次の日はとくに何事も無く時間が過ぎていった。もうすぐこの場所からいなくなるんだと思うとあんなに嫌だった日常がいつもと違って見えた。全ての日課をこなし一日が終わって自室で休もうとしたところに突然父からの呼び出しが伝えられた。くたびれてはいたが、アレンは仕方なしに王の間へ向かった。

「お呼びですか、父上」

部屋に入ると、王と供に見知らぬ人物が二人いた。一人は恰幅の良い体系に良く日焼けした男。年齢は王と同じくらいだろうか、良く鍛えているのだろう、袖から覗いた腕はがっちりとして筋肉質である。もう一人は背の低い若い女性だった。ほっそりとしていて吹けば消えてしまいそうな儚さである。およそ似てもにつかない二人だった。

「紹介するよ、アレン。こちらはブラッド伯爵。南部一帯の広大な農地を治めている。そしてブラッド家の姫君ジェーン殿下だ」

「初めてお目にかかります、若君。本日は大変喜ばしいお話ありがとうございます」

「一体何のことでしょう」

事の成り行きが見えずアレンは眉を顰めて問い返した。

「お前が嫁を迎えるという話だよ。ブラッド家は血筋も統治力も申し分ない。家老たちも満場一致で賛成だ」

「父上、昨日も申し上げたように私はにはまだ」

ちらりとジェーンと呼ばれた女性を見た。髪は赤毛で鳥の巣のようにまとまりがなくふわふわしている。伏し目がちな青白い顔にはそばかすが目立ち、腕などは折れてしまいそうだ。

（おおよそ美しいとは言い難い姫だな。一体この娘のどこが気に入ったというのだろう）

「南部の土地ではワイン作りが盛んです」

ブラッド伯爵が愛想良く話した。

「我が一族の資産もワイン作りの成功があってこそといっても過言ではないのです。今夜は宴を開いて下さるそうで、そこで僭越ながら振舞わせていただきます」

「誠に楽しみじゃ。それまではそうじゃな、ジェーン殿にはアレンが城の案内をいたそう」

「えっ？」

「それはそれはありがとうございます、殿下。さあ、二人とも。行かれるが良い」

ブラッド伯爵はどうも二人を早くこの場所から遠ざけたがっているように感じた。このままこの場を離れても言いものか迷ったが、その場に残る上手い口実を思いつく間もなく追い出されてしまった。

「では行きましょうか、ジェーン姫」

仕方なしにジェーンを見ると、彼女は迷い子のように視線を彷徨わせいて、声をかけられて驚いた様子だった。

「王子様、ありがとうございます」

彼女はあまりしゃべらないタイプ女の子のようだった。城の中の主な場所を案内したが、「

はい」や「ええ」としか答えが返ってこない。だんだん会話に困ってきたアレンは、不躰かとは思ったが気になったことを口に出してしまった。

「ブラッド伯爵はとても広大な農地を治めていらっしゃるとか。さぞかし自慢のお父上でしょう」

ジェーンはずっと伏し目がちだった瞳をわずかにあげた。しばらくの間どう答えようか逡巡するように視線を彷徨わせた末に小声で言った。

「立派な父です。……私には不釣合」

「父親なのに、不釣合いとは。どうしてそんな風に思うのですか」

姫の声はわずかに震えを帯びていた。

「……私は父が恐ろしいのです」

しかしそれだけ言うと口をつぐんでしまった。唇を噛み締め、言葉が漏れ出さないように抵抗しているかのように見えた。

「恐ろしいとは」

ふわふわの赤毛を悲しげに揺らし、姫はまた視線を落とした。

「王子様、今宵は案内をありがとうございます。私はここで失礼します。客室には自分で戻れますので」

それだけ言うとジェーンは走って行ってしまった。

「一体何がどうなっているんだ」

一人取り残されたアレンは途方に暮れながら彼女の後ろ姿を見送ることしか出来なかった。

ブラッド伯爵たちを迎えた宴会は何事もなく終わった。別れ際のジェーンの様子が気になったがその後二人で話せるような機会もなく、あっという間に式当日になった。

その日は朝から素晴らしい快晴だった。さわやかな空気に柔らかい花の香りが運ばれてくる。まるで天気までもがこの日を祝福しているようだ。

「今日でここからおさらばだ。」

自分と結婚をするためにここに連れてこられたジェーンのことを思うと僅かに心が胸が痛む。しかし、結婚式が終わった後に自分が消えるのなら、彼女が王女になる事実は変わらない。その地位が約束されていることだけが罪滅ぼしだ、と思い込むしかなかった。

「僕は森に行くんだ。さ、最後の日、乗り切りますか。」

今一度自分の気持ちを確認してアレンは式の準備に取りかかった。この日のために急遽特別に作られた純白のタキシードと早朝一番に摘み取られた深紅のバラを胸に飾り、鏡で全身を確認すると部屋を出た。

結婚式は城の大広間で行われた。国中の有力者たちが一同に介し、まだ若い新たな国の担い手の門出を祝った。隣に立ったジェーンは同じく純白のレースを幾重にも重ねたふんわりとしたドレスを身を纏い、髪には色とりどりの花をあしらった冠をつけている。相変わらず伏し目がちではあったがこっそり盗み見たその姿を意外にも可愛らしいとアレンは思った。式は順調に執り行われ、やがて日が落ちる頃になると中庭で一般の民も参加できるダンスパーティーが始まった。誰もが機嫌良く、このお祝いの雰囲気を楽しんでいる。だんだん空が藍色に染まり始める頃、とうとうアレンはその場を離れる決心をした。『せめて最後に一目、父上の顔を見て行きたい。』言葉を交わすつもりはなかったが、ただ一目自分の父であった男の姿を目に焼き付けたいと思った。

人でごったがえしている広間には王の姿は無い。おそらく謁見の間で賓客をもてなしているのだろう。行き交う人々は次々と王子に祝いの声をかけていく。しかし都合の良いことにみな酔っている者ばかりで長々引きとめられることも無い。それでもいくぶんかの近道をして城の最上階の中央に位置する謁見の間に近づいた。

パーティー会場から離れたこの広間にはほとんど人の姿はなかった。しかし扉の隙間から明かりが漏れている。王以外に誰かがいるようだ。アレンは何となく気になって中にいるのが誰なのかと聞き耳をたてた。

「今宵は素晴らしい夜ですね。王子は大変立派なお姿でした。きっと良い王になること間違いないでしょう。」

声の主はどうやらブラッド伯爵のようである。

「本当に肩の荷がおりたわい。伯爵殿、今後私に何かあったときはアレを頼むぞ。支えてやってくれ。」

王の声だ。いつもと声の調子がどこか違う。酔っているのかそれとも泣いているのだろうか、妙

に優しい声にアレンは不覚にも自分の目が潤むのを感じた。

「もちろんですとも。喜んでお引き受け致しましょう。」

扉の隙間から中を除くと、伯爵の背中が王に向かってお辞儀をしているのが見えた。

「我が王、今夜は特別な日です。娘のジェーンが一人立ちし、立派な若君の元に嫁いだ。父親としてこれほど誉れなことはありません。私のワイン倉のなかからとっておきのものを一本持ってきました。一緒に一杯いかがでしょう。」

伯爵は赤黒いワインを取りだしてグラスに注いだ。差し出されたそれを、王は嬉しそうに受け取る。様子を見ていたアレンの心が何故かざわついた。

「では若い二人とこの国の明るい未来に乾杯。」

王の言葉でグラスを掲げ、二人は一気に中身を煽った。空になったグラスを見つめ、王が口元をほころばせた。が、その瞬間ぐらりと身体が傾いだ。ドタッと大きな音とともに床に倒れ込んだかと思うとすぐさま激しく体中が痙攣し始めた。

「父上！」

驚いたアレンは思わずその場を飛び出し王の元へ駆けつけた。

「父上一体、どうなさったのですか。」

その顔はいまや蒼白で、玉のような汗が噴き出している。明らかに異常なことが起こっている。

「貴様、一体何をした！」

倒れた王を支えながら伯爵を見上げるような格好でアレンは叫んだ。伯爵は薄い微笑みを浮かべ痙攣する王を見下ろしていた。

アレンが現れても慌てるどころか顔色ひとつ変えずにブラッド伯爵は言った。

「おやおや王子様、あなたは今夜の主演なのですからこんなところにはダメではないですか。今すぐパーティーにお戻りください。」

「貴様！何をしたと聞いている。誰か、医者を呼べ！！」

しかしアレンの声に答えるものは誰もいない。

「無駄ですよ。衛兵も何もかも皆。なんせ今夜は素晴らしい夜なのですから楽しむべきでしょう。真面目に仕事にしているものなどいませんよ。まあ、数名私から特製睡眠薬入りのワインを差し入れた輩はいましたが。」

「なん……だと？」

伯爵はおもむろに玉座に近づくと、そこに腰掛けた。すでにアレンも王も彼の眼中には入っていない。座り心地を心から堪能するようにうっとりした表情を浮かべて目を閉じた。

「素晴らしい。やはり王というのは格別だな。こうも甘くとろけるような気分させてくれるとは。この場所に座るのはこの国を誰よりも思っている者でなければいけない。」

「やめろ、そこに座るな！」

「ここからの景色がみたかったのだ。私のものだ。」

「お前のものなんかじゃない！そこは父上の席だ！」

「なぜです？あなの父上はもう終わった。そしてわからぬか。あなたが王になることもないのだ。」

冷たく蔑んだ目で彼は二人を見下した。アレンはわけもわからぬうちに腰の剣に手をかけ一気にそれを引き抜いた。

「ほう、私と戦うというのですか。今宵あなたがここに来たのは計算外だった。しかしここであなとの父上とともに命を落とすというのも悪くない。」

伯爵も腰からレイピアを引き抜いた。隙のない堂々とした構えだ。伯爵がなかなかの使い手ということが見てとれる。

「あなたは最初からこのつもりでジェーンを嫁がせたのですか。」

「勘が良いですね。アレは私の道具。この平和ボケしてしまった国を変える大切な道具です。」心の底から吐き気がした。アレンは握っていた剣を振り上げると飛びかかった。しかし伯爵は冷静だ。一太刀ずつ流れるように受け流す。

「剣筋が乱れている。あなたの心が私にははっきりとわかる。動揺していますね。そんな弱い者にこの国を任せることはできない。国の将来を考えればもっと戦をして利益をあげ近隣の国々も私達の配下にするべきなのです。南部の国境では争いが耐えない。この国を守っていたのは、戦っていたのはいつも私達だったのだ！」

その話は確かに聞いたことがあった。国境に使者を送り何度も調停の話し合いは行われていた。

「愚王を倒して民を守ることこそ私の努めだ！」

重い一太刀がアレンを襲った。衝撃に握力が麻痺し、手から剣が飛んだ。とっさに手を伸ばしかけたアレンの首もとにずっと冷たくレイピアが突きつけられる。

「王子、これで終わりだ。」

伯爵が剣を振りかざした時、女性の悲鳴が聞こえた。はっと伯爵の動きが止まったそのとき、ジェーンが飛び出してきたアレンを彼の剣から守るように抱きついた。

「お父様お止めください！この方は私の夫となる方ですよ。何てことをするのです！」
怯えて顔色が蒼白になりながらも突きつけられたレイピアの前から彼女は逃げようとしなかった。

「ジェーン、そこをどきなさい。どかないならばお前ごとその男を切り裂くぞ。」
「どうぞそうなさって下さい、私はもうこの世に思い残したことはありません！」
「ジェーン殿...。」

アレンはあれほど伯爵に対して怯えていたジェーンが、身を呈して彼から自分を守ろうとすることに驚いていた。しかし娘が現れても薄い笑みの仮面を顔から外さない伯爵、そして傍らですでに動かなくなってしまった父にアレンは心を決めた。こっそり剣を握むと伯爵に向けて思いっきり振り上げた。ふいをつかれた伯爵の腕からレイピアが部屋の隅へと飛ぶ。一瞬の出来事だった。その喉元に今度はアレンが剣を突きつける。

「アレン様...。」

ジェーンが震える。

「伯爵。お前のしたことは決して許されない。王を殺害した大罪だ。しかし、娘の前でお前を殺しはしない。この国から出て行きなさい。二度と戻って来るな。」

静かに言い放った。伯爵の表情からは何も読み取れない。何も言わずに立ち上がると部屋から出て行った。ジェーンは彼を追いかけるかと思ったがそうはしなかった。しかし彼の出て行った出口をいつまでもじっと見つめていた。アレンは父の傍に行った。父の顔は毒を煽らされたとは思えない静かな表情だった。高く上がった月の白い光が残された者たちを静かに照らしていた。

アレンがやってきたとき、ローリエは泉のほとりで膝を抱えてぼんやりと座っていた。泉はほのかに発光していたがそれはもう消えかけで最後の一息のような儚さだった。

「遅かったじゃない、もうぎりぎりよ。」

ほっとした彼女の顔をみると決心が鈍る。しかしアレンは決めていた。

「ローリエ、ごめんね。僕はまだやることがあったんだ。人間でいる。」

一息に言い終えてからそっと目を上げる。彼女はなんとも言えない表情を浮かべていた。

「ああ、アレン。」

「ごめん、ローリエ。」

ただ謝ることしかできなかった。

「いいえ、いいえ。アレン。良く決意したわ。私は、そうね。もちろんがっかりしたわ、少しね。でも、あなたの決断を祝福するわよ。」

「ローリエ。」

彼女を抱きしめながらアレンは思った。今日この日を、この一日を、今のこの気持ちを、自分は決して忘れないだろう。だけど、きっとこれから先何があっても自分は大丈夫だ、そんな気がした。

アレンは王位を継承した。傍らにはジェーンがいた。父親の伯爵が王を殺した、という噂は瞬く間に国中に広がった。しかし娘の彼女が身を挺して王子を守ったということも一緒に広がったため、好奇に視線にさらされることはあっても面と向かって彼女に辛く当たる者はいなかった。そしてその控えめだがどこか凜とした雰囲気を持った彼女は、いつしか自然と皆に受け入れられていった。

二人の間には可愛らしい子供も生まれ、アレンは王として一層頑張って勤めを果たそうとした。もちろん失敗もすることも少なくなかったが、賢く優しい妻と子供たちが彼の支えとなった。

夫婦は幸福に歳を重ねていった。やがて王位を子供に譲り、二人は森のはずれで静かに暮らした。そしてある日、ジェーンはアレンの腕の中で逝った。あなたといれて幸せでした、と微笑みながら。美しく愛おしい妻。優しく彼女を抱きながらアレンは一人涙を流した。何度もありがとうと呟きながら。

そして、ある時、とうとう自分の番がきたことを悟った。

時刻は夜。

空高く、美しい満月の昇る夜。

アレンは一人、杖をつきながら泉へ向かった。

「待っていたわ。」

あのとときと変わらない姿のローリエが迎える。

月光と同じ強さで発光する泉にはエルダーフラワーの甘い香りがそこいらに漂う。

アレンはそっと泉に浸った。

「満月の夜は魔法の力が高まるの。さあ、私と一緒にいきましょう。」

歌うようなローリエの言葉に答えるように、立派な二ふりの角を携えた雄鹿が現れた。

銀色に光る雄鹿と雌鹿はお互い見つめ合うとどちらともなく駆け出した。

時折、出会った頃の姿に戻りながらいつまでも、楽しく、じゃれ合いながら。